



ブドウ栽培の技術改善

赤羽紀雄

まえがき

東北・北海道

の果樹の中、最近とくに目立つてきたことは、ブドウ栽培面積の増加である。その理由として、今のところブドウは農家純益が案外に多いこと、誰が栽培しても一応容易に見えること、品質のよいものが生産できる等、いろいろあろうが、この急速に栽培反別の増加している時こそ、われわれが最も考えねばならぬ時期である。無計画にして一攫千金を夢みるような増殖は必ず悔を残すことになるばかりでなく、せつかく新しい産業として躍進せんとしているブドウ栽培の前途を暗くするものである。したがって、ここにブドウ栽培について今後の在り方について検討してみたいと思う。

ブドウ栽培と気象条件

ブドウ栽培でまず考えられることは気象条件であるが、ブドウほど気象に対する適応性の広いものは他の果樹ではまずない。南は九州より北は北海道まで一応経済栽培が行われていることは、栽培がどここの場所でも容易であることになるかも知れない

が、また反面、よほど特徴がない限り産業となり得ないし、栽培及び販売の両技術に競争がさかんに行われる原因にもなる。ブドウは貯蔵、輸送が困難なために、一旦生産過剰になつた場合は、加工にでも相当量を向けなければ、生果の捌きが困難になる。その場合は生産費をよほど引き下げた栽培でなければ自滅することも起り得る。したがって今後の開園に際しては、将来の見透しをつけた栽培が大切である。

ブドウ栽培と立地条件

東北・北海道の立地の条件が他府県と異なる点は、まず雨量の少ないことで、年平均一、〇〇〇ミリ程度である。病害の少ない点ではまず有利であると言わねばならない。しかし一方、気温は低く、とくに秋が短い嫌いがある。つまり収穫時期における早霜が問題で、現在のカメルス、ナイヤガラ、デラウエア等から言えば、十月月上旬に強い初霜が来る所では、経済栽培は困難であろう。もつとも今後枯木、新品種で早熟性のものが発見されれば別である。本道では日本海沿岸つまり寿都、岩内、余市、塩谷、留雨の海岸線、さらに伊達紋別、浦河

沿岸等は降水量、気温の点から言えば絶対好であつて、まだまだ増反の余地があると考える。ただしブドウ栽培は蔬菜と同様に近郊園芸の性格が強いから、消費地ができるだけ近いことが必要である。また本道は、一部暖地を除いて大半は冬期の寒害を避けるため枝を棚から下し、いわゆる枝伏せを必要とするので、独特の整枝技術を確立しなければ将来必ず行き詰りが来ると思う。少なくとも現在の整枝では枝伏せに際し無理がかかるために、主幹は変曲し、先端部は衰弱し、主幹よりの徒長枝が簇出し、樹齡は勿論のこと、最盛期を短縮させている。樹勢を維持するために多大の肥料と労力を要し、遂には更新の止むなきに至るのが常套である。

栽培上の注意

東北・北海道のブドウ栽培上、まず取りあげて欲しい二、三について述べてみよう。

一 栽植距離

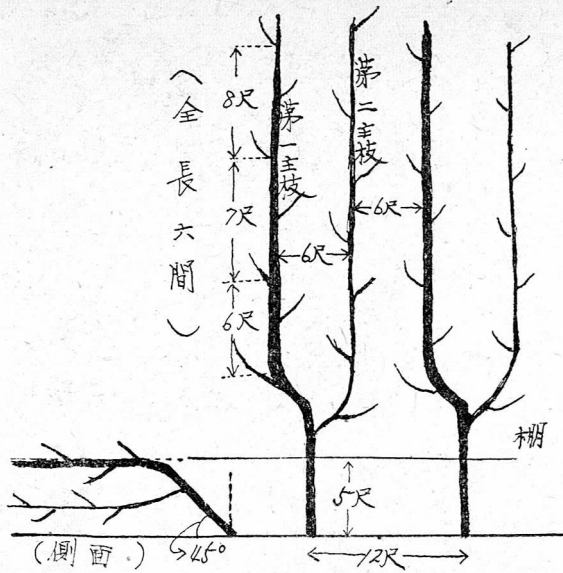
従来のように一間半四方では、普通の土壌であれば数年にして枝の交錯をみる。植え幅は品種、土質によつて変えることは当然であるが、ブドウは他の果樹より伸長力が強く、距離の狭い時には花振を起し、果実の着色を遅らせ、病虫害の発生を催し、新梢の伸長が秋まで続き、翌年の結果を不良ならしめるばかりでなく、凍害の原因にもなる。距離の狭いために起るいろいろの障害を手先の剪定や施肥技術で調整しようとしても到底不可能であることを銘記すべきである。少なくともデラウエアで三間四方、カメルス、ナイヤガラでは三間半乃至四間四方は必要であろう。最初二間四方に定植した後、成木になつてから間伐する方法もあるが、ブドウは細根が少ないため年数が経つほど移植を嫌うし、そうかと言つて間伐樹を捨てるのも人情として惜しいものであるが、密植園はぜひ間伐が必要である。間伐後の空間は一、二年にして塞くことはできるし、収量の減収は思つたより少なく二、三年にしてかえつて増収になる。なお幼木中、空間が無駄であれば間作物で収入をあげればよい。この場合注意を要することは、ブドウより半径五尺以上は離さねばならないし、馬鈴薯や果菜類はなるべく避けて、豆類やイチゴ等、果樹より肥料を奪取しない、かつ根張りの少ない作物を間作物すべきである。将来ブドウ園の被覆を目的として緑肥作物であれば最適である。

二 土壌管理(特に土壌流亡防止及び被覆)

ブドウは比較的瘠薄地においても生育結果をみるが、樹齡や肥料費の点からみれば、やはり肥沃地にこしたことはない。しかし他作物の栽培が成り立たない場所を利用することに有利な場合がある。概して土壌的に悪条件の所に栽培されると考えるべきである。

ここに特に土壌管理法が必要となる。管理にもいろいろあるが、特に園内の被覆作

物について言うならば、大切な表土の流亡を防止するため、斜面に直角に帯状の緑肥(クローバー類等)栽培はぜひ実行願いたい。あるいは栽植された直下に長さ一間程度の土止め丸太を横に埋めて置くのも一方法であろう。例えば傾斜五度で表土一寸が流亡したとすれば、反当り一万五千貫ほどの肥沃な泥が流れることになるのであるから馬鹿にならない。さらに火山灰土や砂丘地帯の栽培には、夏期早魘を防ぐためにクローバー、ベッチ類を間作して、七月中・下旬に刈り取つて全園乃至は栽植場所を被覆することが大切である。クローバー、ベッチ類なら五月上旬・中旬播種すれば七月下旬には反当り生草量はクローバーで五百貫(第一年目)、ベッチで八百貫は得られる。刈り取つた生草は毎年つぎつぎと敷草して行けばよいのであるが、もし土中に鋤き込む場合



(全長六間)
 (側面) 45°
 7尺

は、夏期乾燥時を避けて秋期、ブドウの落葉後にしないや窒素の遅効きとなつて思われ失敗することがあるから注意が必要である。被覆や鋤き込みを目的とするならば、十字科作物(菜類)や雑草でも一応よいわけである。とくに幼樹の中は間作物としてベッチと燕麥の混播を五月上旬に行い、七月に青刈すれば生草量が増加して敷草の目的と土壤流亡防止目的が果される一方法である。

三 整枝

従来の整枝は枝伏せに際し不都合な点の多いことは前に述べたとおりであるが、これらの不便を除き樹の生理をなるべく害さない整枝法はないものか、私案を述べて大方の参考にしたと思う。

完成された樹型を一口に言えば、中短梢剪定をとり入れたオールバック整枝である。栽植距離は幅二間、奥行き六間、反当り二十五本植、主枝は二本とし、第一主枝、第二主枝の太さは明瞭な区別があり、主枝の分岐は一箇所より出ている。側枝は図のような間隔で互に出て各主枝に七本宛程度で、先端に行くほど間隔が広くなる。主幹は棚まで四十五度の傾斜で斜に導く。この整枝で収量を概算してみると次のようである。第一主枝における側枝七本(長さ約三尺)とし、結果母枝は一側枝に三本で、計二十一本(3×7×11)、結果枝は一結果母枝五本として計百五本(5×

21) 105)、房数は一結果枝二房として計二百十房(2×105=210)、一房五十匁とすれば計十貫五百匁(50×210=10500)、したがつて一樹の収量は主枝二本で二十一貫、反当り二十五本で五百二十五貫である。実際二割の障害があつたとしても、四百四十貫は無理なく収穫できる。その上枝伏せは極めて容易にできる。次に幼樹からの整枝法を述べてみよう。

第一年目秋 基部一・二節で短剪。
第二年目秋 新梢の春から夏の間に伸長した充実した部分で剪除する。この場合、新梢はできるだけ長く残し、副梢があれば一芽を残して短切する。
第三年目秋 先端(あるいは附近)より出た強勢な新梢は、将来第一主枝となるのであるから、なるべく長く残し、充実を欠く部分で剪除し、前年の副梢または先端部より三・四節下方より出た幾らか弱い新梢を将来の第二主枝候補とし僅かに先端を剪除し、その他の新梢は一・二節の短梢剪定を行う。なお第三年目の春には各節より新梢が伸長するので、目的とする二本の主枝候補以外の新梢は五葉前後で摘心し、結果すれば摘房する。

第四年目春 四年目の春には竹を以て四十五度の傾斜に誘引する。この場合、芽をよくみて、芽が傾斜の上下にならないように左右に向けることが大切である。第三年目に定めた二本の主枝を真直ぐに一定の間隔を保ちつつ棚に導く。さらに図のように主枝の両側に一定の間隔に側枝を出させ、その他の枝は間引くか一・二葉で摘心する。第四年目には若干の収穫を行つてもよい。

第五年目以後 第四年目の操作を繰り返して、収穫をみながら主枝は所定の六間まで伸長させ、その他、細部の操作はあるが、紙数の関係上つぎの機会にゆずる。

四 フィロキセラ免砒

フィロキセラの免砒について最近ブドウ産地で問題になつてゐるが、寒地のねらいとしては特に寒害に強いもの、及び自根より熟期を早めるものなどが重要視されねばならない。残念ながら、これらに対する試験成績がないので、どれが最適か断定し得ない。また砒木は種類により土壤条件に対する適応性が異なるから、自園の土壤を検討してから採用することが大切である。今東北・北海道に入つている砒木について土壤との関係を示せば次のようである。

△グロアールモンペリー 浅根性で接木活着が良好、果実の熟期を早め、肥沃な沖積土を好む。とくに瘠薄乾燥、粘土を嫌う。

△三三〇九 深根性で太く土壤の適応範囲が広い。乾燥にも強い。土層の深い砂質または礫質のやや乾燥地に適する。

△三三〇六 浅根性で、一般に肥沃な湿地に適し、表土の浅い瘠薄砂質地で良好な成績をあげている。

△テレキ8B 結果期に入るのが早く、早熟の傾向がある。やや乾燥する壤土、砂壤土、礫質壤土を最適とする。また、乾燥、湿地にも耐え、瘠薄地でもよく成育し、適応性が広いようである。

以上、寒地のブドウ栽培で早急に改善して行くべき事項を取り上げて概説したのであるが、要は東北・北海道の栽培者は暖地府県の栽培技術を鵜呑みにして、そのまま真似るがごときことは極めて危険である。もちろん参考にするには結構であるが、寒地としての特種の栽培技術を考案し、臨機応変、常に研究心をもつて技術の改善に邁進していただきたいものである。(筆者は北海道立農試種藝部技師)